

磐梯火山の南西山麓に存在した謎の温泉, 「義敷温泉」

千葉茂樹*

“Gishiki Onsen”, the mysterious hot spring ruins that existed at the southwest foot of Bandai Volcano

CHIBA Shigeki*

Abstract On April 12, 1987, the author found traces of a hot spring, during the geological survey at the southwestern foot of Bandai volcano. I searched old documents regarding this hot spring but there was no record, and it was “the mysterious hot spring” for a long time. On November 2011, I found and purchased an old sightseeing guide paper “View of Bandaisan Shrine and Enichiji Temple” at an antiquarian bookstore. The guidebook was published in 1906, and most of the content was an explanation of Enichiji Temple, but Mt. Bandai was included in the picture. On the part of Mt. Bandai in the picture, there was an illustration of the wooden house and the word “Gishiki Onsen”. With this discovery, there is a high possibility that the mysterious hot spring is “Gishiki Onsen”.

On May 4, 2021, I conducted a field survey again and recorded the current state of the hot spring site. The hot spring site was located at 140°02'36"E, 37°35'55"N. And the size of the site was approximately elliptical with a width of about 16 m x 14 m.

Looking at old topographic maps, at the location of “Gishiki Onsen” there is a symbol for mineral springs in 1926 but not in 1933. Therefore, it is understood that “Gishiki Onsen” existed at least from 1906 to 1926, from the changes of old pictures and topographical maps.

Key Words : Gishiki Onsen, Bandai volcano, ruins of the hot spring, old drawing “View of Bandaisan Shrine and Enichiji Temple”, Bandaisan Shrine, Enichiji Temple

はじめに

著者は1979年から磐梯火山の地質学的研究を行ってきた。この野外調査の中で、文化地質学的遺構（たとえば明治神宮（千葉2023）など）を数多く見てきた。本論の温泉跡は、1987年の磐梯火山南西山麓の地質調査の際に発見したものである。しかし、1987年当時は古文書を探しても本温泉跡の記載はなく、長らく謎の温泉跡であった。2011年11月、古書店のネットショップの商品画像の中に、明治期の慧日寺を描いた名所案内書「磐梯山神社及恵日寺之景」を見つけ購入した。名所案内書は恵日寺の記載が主であったが、イラストの中に磐梯山が描かれており、その西側の稜線上に「義敷温泉」の文字と絵があった。その位置は本温泉跡とほぼ同じであった。これを受けて、2022年に温泉跡に赴き、地形・敷地・源泉・流路・石・樹木などの状態を調査した。その結果、人為的な痕跡が明瞭に残っていたことから文化地質学的遺構と確信し、報告することとした。

なお、「えにちじ」の表記は、現在では「慧日寺」、名所案内書では「恵日寺」である。本論では、名所案内書に関連する記載では恵日寺を用い、それ以外では慧日寺を用いる。

以下、現地調査の記録、名所案内書の解析、考察などを記載する。

以下の本文中に引用したFig. OD-1~3は、地球科学オープンデータとして、本論文がJ-STAGEに掲載されるのに合わせて（本誌出版から2ヶ月後に）J-STAGE Dataに掲載にされます。J-STAGEの当該論文ページから直接J-STAGE Dataにアクセスすることも可能です。

温泉跡の地理・地質の概要

温泉跡は、磐梯火山の南西山麓に位置する（第1図）。また、この地域の地名は、磐梯火山1888年噴火の調査報告書（大塚1890）の「磐梯山の図」に「大儀式」「小儀式」とある。本温泉跡付近は小儀式に当たる。さらに、近傍に寺院跡「儀式山遺跡」もある（磐梯山慧日寺資料館1994, 第1図）。

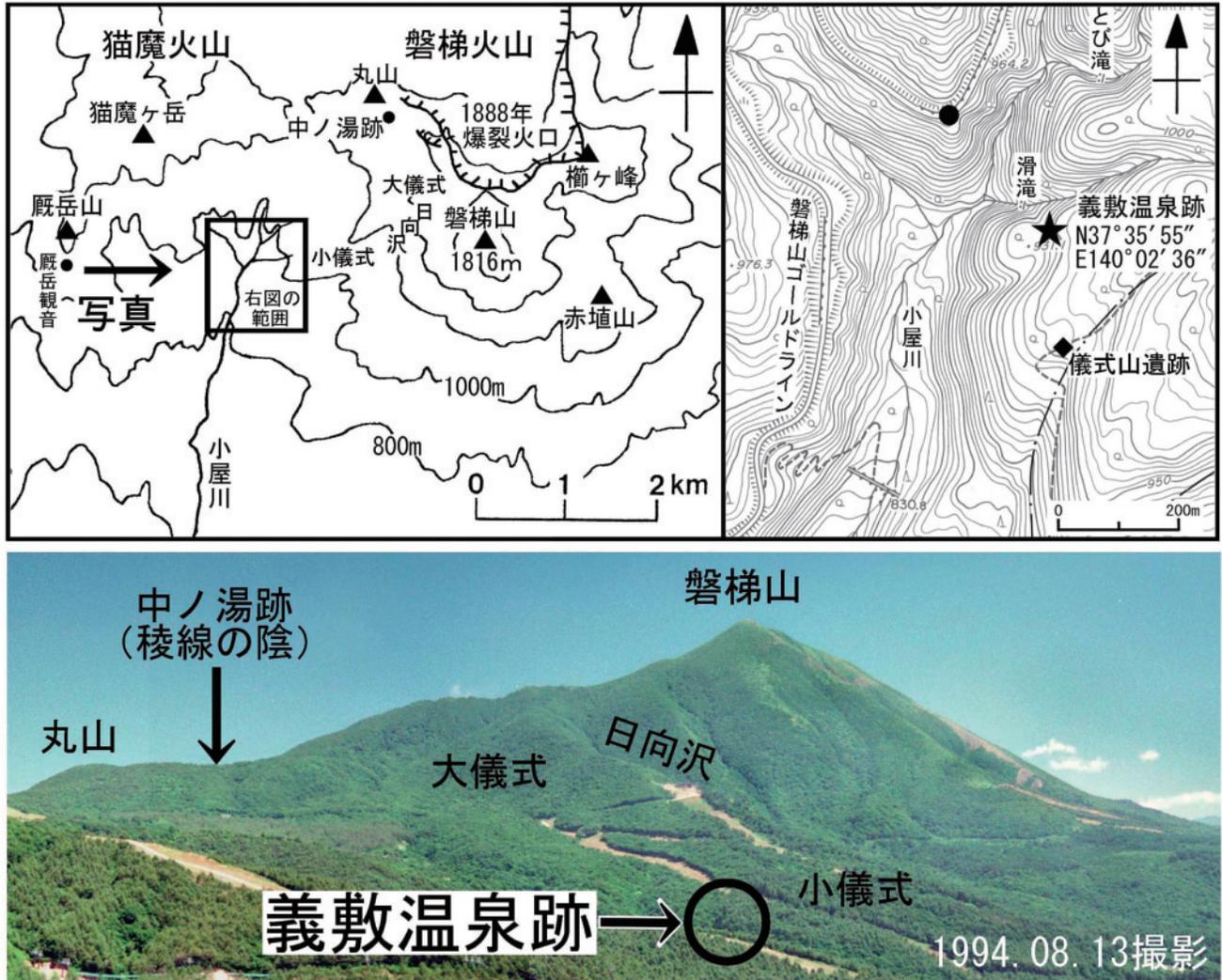
温泉跡付近の地質は、磐梯火山の火山活動史区分では第Ⅲ期の溶岩に当たる（千葉・木村2001）。また、約3.6万年前に生じた爆発カルデラの西側の残丘でもある。

更に、温泉跡の緯度・経度は、国土地理院の地理院地図（国土地理院2023）から求めると、北緯37度35分55秒・東経140度02分36秒となる（第1図）。

2023年8月11日受付 2023年11月24日受理 担当エディター：卜部厚志

*福島支部 福島自然環境研究室 〒969-3141 福島県耶麻郡猪苗代町大字磐里字村東4-3. E-mail: s.chiba@vesta.ocn.ne.jp

Fukushima Branch, Fukushima Natural Environment Laboratory, 4-3 Murahigashi, Iwasato, Inawashiro-machi, Yama-gun, Fukushima Prefecture.



第1図 「義敷温泉」跡の位置－地形図と写真－。国土地理院発行の1万分の1火山基本図「磐梯火山」を使用した。

Fig. 1 Location where ruins “Gishiki Onsen” existed—Topographic map and photograph—.

The 1:10,000 basic topographic map of volcanoes “Bandai Volcano” published by the Geospatial Information Authority of Japan was used.

温泉跡の調査記録

第2図は、温泉跡付近の見取図で、2022年5月4日の現地調査から作成した。温泉跡は平坦地イを中心とする一帯である。斜面傾斜は、小儀式一帯（第1図）では10～15°であるが、平坦地イの上方約10m付近から約30°になる。平坦面イより下方は急傾斜となり約30m下ると平坦面口に至る。これより下方は急傾斜で小屋川へ達する。

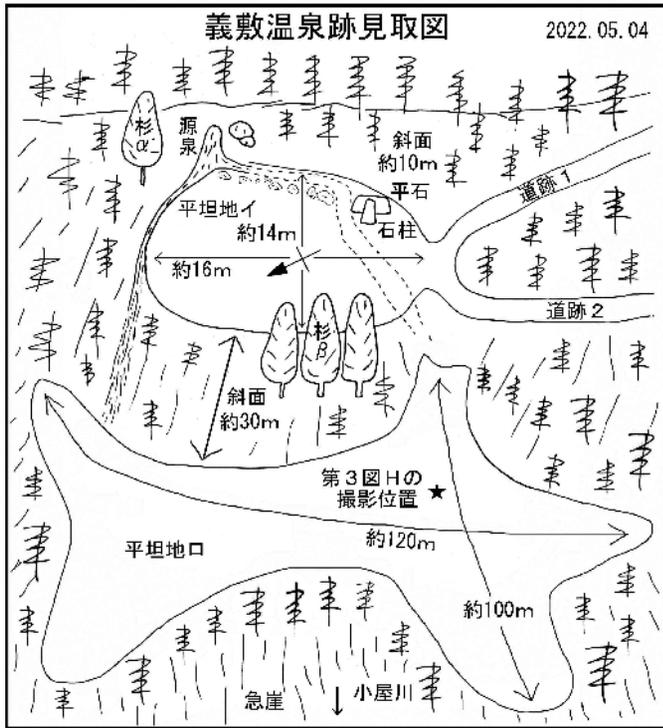
第3図は温泉跡の写真で、撮影日は各写真に記載した。

以下、温泉跡について第2図・第3図・オープンデータの図を使い説明する。

温泉跡が存在する平坦面イは、実測で約16m（N20°E方向）×約14m（N70°W方向）のほぼ楕円形である。東北東端の斜面上部に源泉がある（第2図、Fig. OD-2）。ここから出た湧水は源泉の下方約4mで二股に分かれる（第2図、Fig. OD-2：A・B）。北側の流路は斜面を北西方

向に流れ下り平坦面口に達する。南西方向の流路は、平坦面イ上を流れ平石周辺を通り南西斜面に達する。この流路は、1987年には水が流れていたが、2022年には平石の手前で液体の水はなくなり、そこから南西斜面までは黒っぽい湿地であった（第2図、第3図B・C・D・F）。これより下の斜面でも、小石が露出する枯れ沢の状態（第3図G）で、平坦面口に達する（第3図H）。

上記の平石とその隣の石柱は、平坦面イ内の東側に位置する（第2図、第3図B・C）。石柱は、根元が約60cm角、高さが約100cmの柱状である（第3図B・C・D・F）。地上40cm付近から斜め約45°の角度で上半分がなく、横からは三角形に見える。目視観察で安山岩と判断した。表面にはコケが生えていた。コケの上から刻字の有無を確認したが見つからなかった。平石は厚さ約30cmの台形で、水平方向の大きさは底辺約200cm×上辺約120cm×高さ約100cmであった（第3図D）。上面・側面とも表面はシャープであった。目視観察で安山岩と判断した。表面にはコケ



第2図 「義敷温泉」跡の2022年の見取図。
Fig. 2 Sketch map at ruins "Gishiki Onsen", at 2022.

があり、上面には低木が生えていた。石柱・平石とも、分布状態や形状から、人の手が加えられたように見えた。また、源泉から石柱・平石の間には、湧水の流路沿いに直径20～50 cmの石が分布した(第3図B・C)。更に、平坦地イでは比較的大きな石はこの付近にしかなかった。この石の分布状態から、源泉から南西方向に続く流路は人為的に作られたように見えた。

平坦面イの周囲の樹木を概略的に見ると、南東から南西方向はカラマツ林で、他の方向は雑木林であった(第3図A・B・C・F・G・H)。この中に特徴的な杉の大木が2群あった。一つは北東側の上り斜面にあり α とする。もう一つは西側の下り斜面にあり β とする(第2図、第3図A・B・E・H)。 α は4本からなり、そのうちの1本が大きく目立つ。 β は6本からなり、そのうちの3本が大きく目立つ。また、平坦面イ周辺の杉は α ・ β だけである(第3図E)。更に、この杉 α ・ β は、観光道路「磐梯山ゴールドライン」からも容易に認識でき、温泉跡の目印となる(第1図、第3図E)。

平坦面イの南南西端には2本の道跡1・2があった(第2図、第3図F・G)。

平坦地ロは、平坦地イの西側斜面の下方約30 mにあり、広さは目測で約120 m×約100 m、状態は枯れた葦原であった。また、地表には葦が密に堆積していた。さらに、葦原には樹木がなく、上空の約60%が見通せた(第2図、第3図H)。

源泉の現状

現地調査は、1987年4月12日(Fig. OD-2:A)と2022年5月4日(Fig. OD-2:B・C・D)に行った。1987年の写真は、残雪丘から俯瞰している。2枚の写真から、湧出位置が35年間に約2 m南南西側へ移動したことがわかる。湧水の流路は、平坦地イに達する直前に2方向に分かれる(Fig. OD-2:C)。源泉付近には、1987年・2022年とも黄橙色の沈殿物が大量に存在した(Fig. OD-2:D)。流量は、目測で1987年の方が多かった。これを裏付けるように、南西方向の流路は、1987年には水が流れていたが、2022年は途中から黒っぽい湿地となった(第2図、第3図B・C・D・F)。源泉の水温は、1987年が22℃、2022年が17℃であった。

2022年5月4日の調査では、第1図の右上図の●から古い林道跡を歩き、小屋川上流のとび滝・滑滝などを通った。その際、5か所で本温泉跡と類似の黄橙色の沈殿を伴う湧水があった。そのうち1か所の水温は17℃であった。なお、これらの湧水は谷川沿いにあり、また人の手が加わった痕跡は見当たらなかった。

名所案内書「磐梯山神社及恵日寺之景」

Fig. OD-1は、名所案内書「磐梯山神社及恵日寺之景」の全体像である。第4図のa→Aは部分拡大で「明治39年2月刀、合資会社光彰館製版」とある。

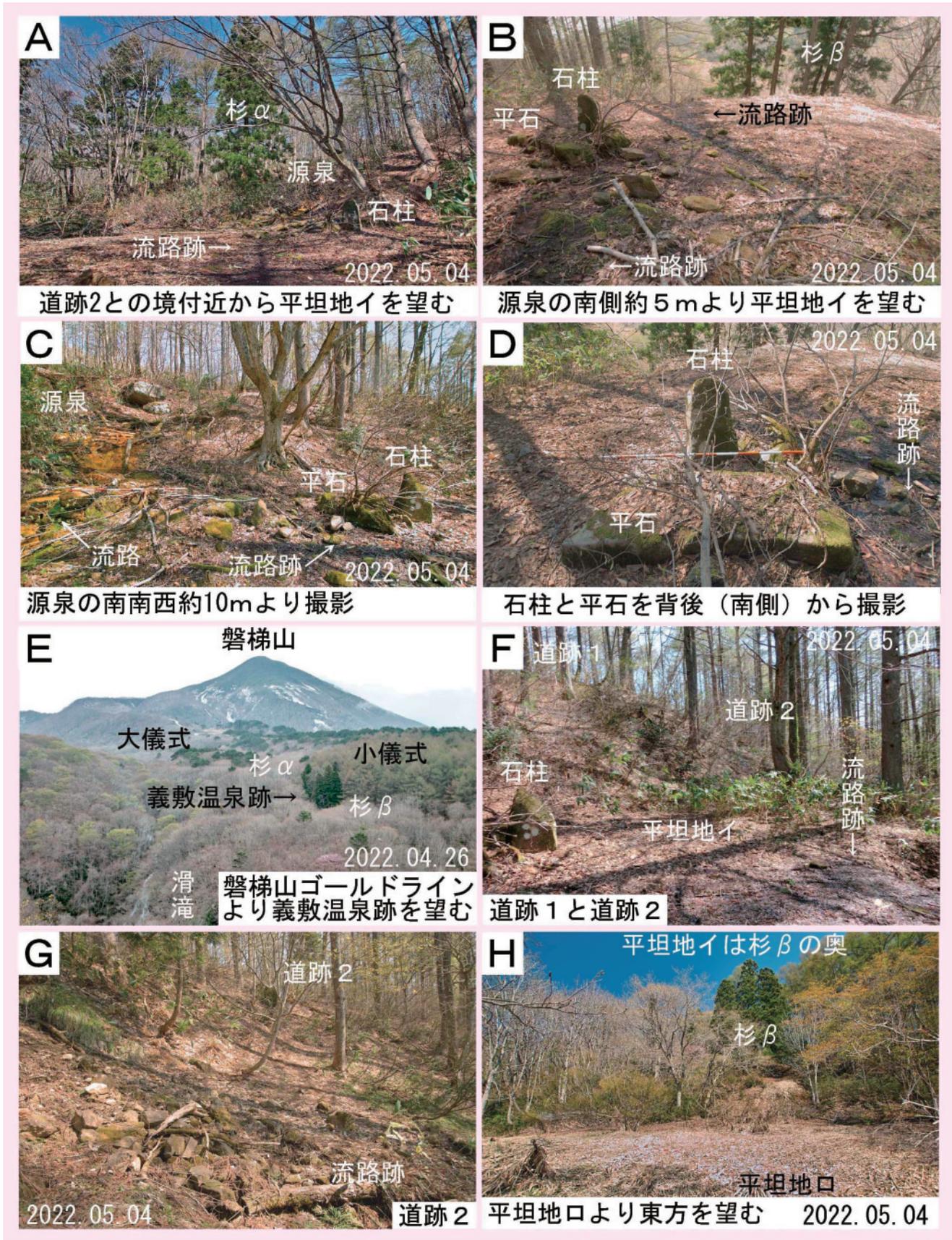
この名所案内書の絵には、前景に恵日寺と磐梯山神社が、背景に磐梯山と猫魔嶽ねこまだけと厩嶽山うまやだけさんが描かれている。また、磐梯山の部分には拝殿と奥ノ院、厩嶽山の部分には観音堂と籠堂がある。さらに、左下の部分には1899年(明治32年)に開通した岩越鉄道(現在のJR磐越西線)が描かれている。なお、地理院地図(国土地理院2023)では、猫魔嶽と厩嶽山の「嶽」が「岳」となっている。

また、慧日寺は廃仏毀釈運動により1869年(明治2年)廃寺となり、1904年(明治37年)に寺院として復活した(磐梯町教育委員会1985)。名所案内書(Fig. OD-1)は1906年(明治39年)発行で、復活して間もない慧日寺が描かれており、慧日寺の変遷の資史料としても重要と考えられる。

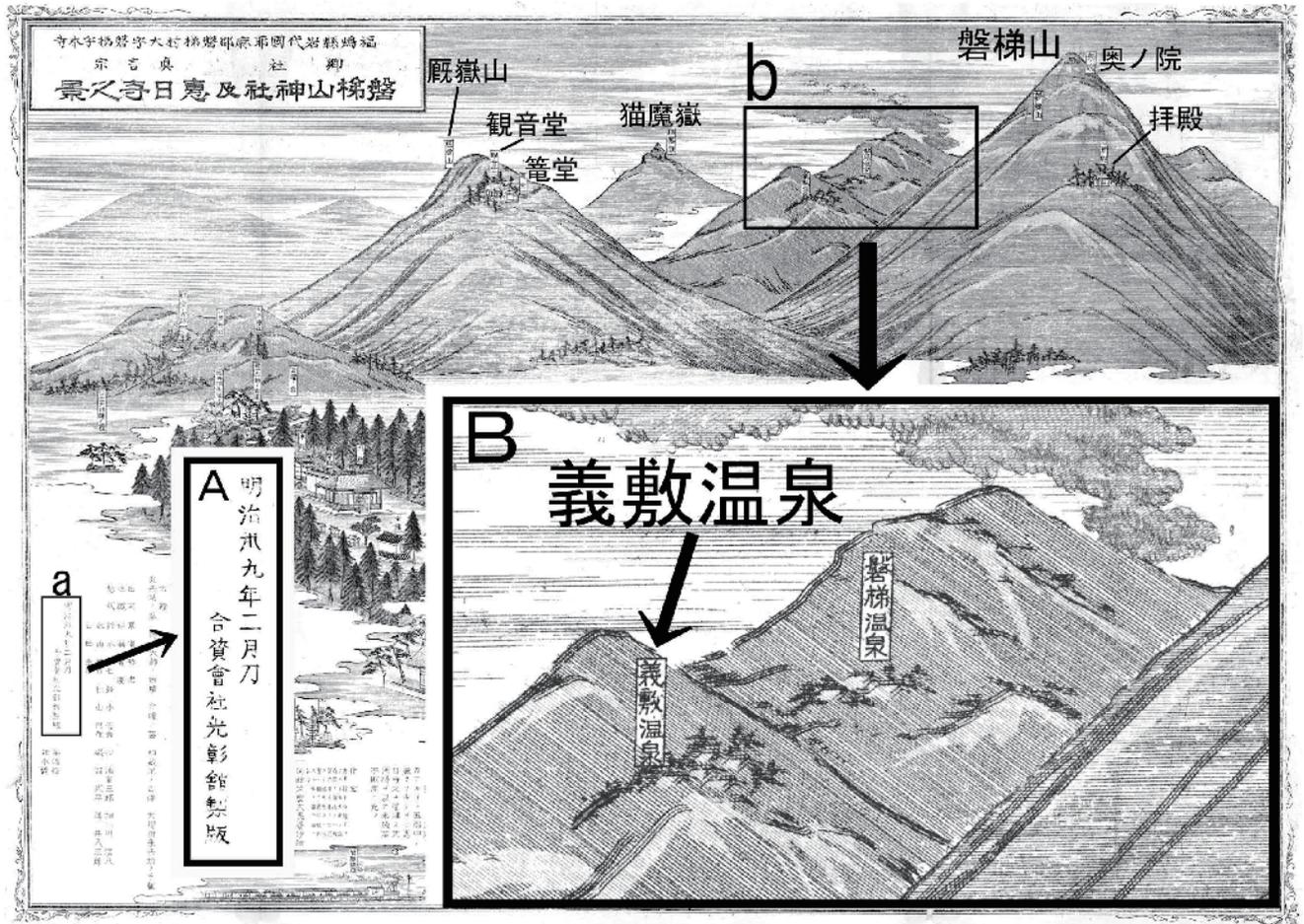
「ギシキ」の表記

名所案内書の表記は「義敷温泉」である。この地域の地名は、大塚(1890)では「大儀式」「小儀式」、磐梯町史編纂室(1977)では「儀式山」とある。

地名は先に音が存在し、後で字が当られる場合がある。この例が北海道の地名である。本温泉名も元々「ギシキ」という地名の音があり、儀式や義敷が当て字されたと考えられる。また、資史料を探したが、この地名の起源に関する



第3図 「義敷温泉」跡の2022年の写真。
Fig. 3 Photographs explaining the ruins "Gishiki Onsen", at 2022.



第4図 名所案内書「磐梯山神社及恵日寺之景」の義敷温泉部分の拡大図。
 Fig. 4 Enlarged view of "Gishiki Onsen" on the old sightseeing guide paper "View of Bandaisan Shrine and Enichiji".

る記載は見つからなかった。本報告では、名所案内書の文字「義敷」を用いた。

地形図から見た義敷温泉の変遷

Fig. OD-3 は、大日本帝国陸地測量部および国土地理院発行の5万分の1地形図である。なお、発行年の記載は元号である。

1926年（大正15年）発行の地形図では、小屋川上流の台地に鉱泉の記号がある（Fig. OD-3：Aの矢印1）。この位置は本論の温泉跡とほぼ一致する（第1図）。1933年（昭和8年）発行の地形図では、鉱泉の記号が消えている（Fig. OD-3：B）。1958年（昭和33年）発行の地形図（Fig. OD-3：C）では、地図の南端から北東端へ続く山道が、1933年（昭和8年）発行の地形図（Fig. OD-3：B）より広い道として描かれている。

以上の地形図の変遷から、本論の温泉跡は1926年（大正15年）には鉱泉として存在し、1933年（昭和8年）にはなくなっていたと考えられる。なお、Fig. OD-3：Cの道の屈曲（矢印2）は、温泉跡より約100m南であり、第2

図の道跡1・2とは無関係と考えられる。

Fig. OD-3：Aに、鉱泉の記号を地形図の凡例から抜き出し掲示した。当時の鉱泉については内務省衛生局（1886）に定義があり、要約すると「温度とは無関係に沈殿物等が多い湧水」である。また、現在の温泉は温泉法（環境省2022）で定義される。要点を書くと「水の温度が20℃以上・残存成分が水1kgに対し1000mg以上・指定18種類の成分が1種類でも規定量以上、の3条件のどれかに該当すれば温泉」となる。これらから、概略的には明治期の鉱泉≒現在の温泉と考えることができる。

考察

平坦面は、現地調査のデータ、すなわち、源泉があること・平坦面の面積が200m²程度であること・加工した可能性が高い石が存在すること・温泉水の流路が人為的と考えられること・人為的な杉があること・山道が2本接続していることなどから、温泉跡である可能性が高い。

次に、本温泉跡が名所案内書「磐梯山神社及恵日寺之景」にある義敷温泉と同一か否かを考える。本温泉跡の位置は、

磐梯火山の南西山麓の中腹である（第1図の写真）。また、第4図のb→Bは、Fig. OD-1の磐梯火山の部分拡大したもので、西側の稜線の中ほどに「義敷温泉」の文字と絵がある。以上から、本温泉跡と名所案内書の義敷温泉が同一である可能性が高い。

また、後述に中ノ湯が登場することから、名所案内書の絵にある「磐梯温泉」について記す。磐梯温泉とは、磐梯火山の頂部にあった上ノ湯・中ノ湯・下ノ湯を指す（磐梯町教育委員会1992）。しかし、1888年噴火で、下ノ湯は小磐梯山の山体と共に消失し、上ノ湯・中ノ湯は甚大な被害を受けた（犬塚1888）。その後、中ノ湯は復興し1998年まで続いたが、経営者の逝去により廃屋となった。名所案内書の発行が1906年（明治39年）であることから、名所案内書の磐梯温泉は中ノ湯を指すと考えられる。

次に義敷温泉の営業の時期を考える。1906年（明治39年）発行の名所案内書には義敷温泉がある。また、磐梯火山の南西山麓の地形図（Fig. OD-3）では、1926年（大正15年）には鉱泉記号があり（Fig. OD-3：Aの矢印1）、1933年（昭和8年）には鉱泉記号がない（Fig. OD-3：B）。以上から、義敷温泉は少なくとも1906年（明治39年）から1926年（大正15年）には存在したと考えられる。また、義敷温泉の廃業は、1933年（昭和8年）の地形図に鉱泉記号がないことから、1926年（大正15年）から1933年（昭和8年）の間と考えられる。さらに、その名前が1906年発行の名所案内書に掲載されていることから、義敷温泉は1906年以前に磐梯温泉と肩を並べるほど繁盛していたと考えられる。したがって、開業時期は1906年（明治39年）より相当前と推定される。以上から、義敷温泉の営業時期は、明確ではないが明治中期から昭和初期と推定できる。

次に、この場所に義敷温泉が存在した理由を考える。

源泉の水温は、温泉の栄枯盛衰に極めて重要である。その例として中ノ湯の源泉の温度について記す。内務省衛生局（1886）では87°F（30.6℃）噴気で加熱とあり、福島県企画開発部開発課（1965）では66℃とある。著者の測定では、1985～2001年は20～23℃であったが、2005年6月17日には56℃（千葉2005）、2006年8月7日には63℃と上昇し、2023年10月18日には26℃と低下した。

義敷温泉跡の源泉の水温は、1987年が22℃、2022年が17℃と低い。また、地理的にも不便な場所で、この場所で沸かし湯を営業する積極的な理由は見当たらない。しかし、少なくとも1906年から1926年には温泉として営業していた。

また、山頂近くの磐梯温泉は1646年（正保3年）に開業し、1888年の噴火まで繁盛していた（磐梯町教育委員会1992）。しかし、1888年噴火でこれらの温泉は壊滅または甚大な被害が出て、営業できない状態となった。

年代を遡って、1814年（文化11年）には、会津藩に「磐梯温泉小屋川へ引下につき御願書」およびこれに反対する書状が提出されている（磐梯町教育委員会1992）。御願書の概要は、磐梯温泉の湯を小屋川まで樋で持ってきたいで

ある。これらの書状から、1814年ころは小屋川周辺（義敷温泉周辺）には高温の源泉がなかったと解釈できる。

これらを総合して、以下の推論をした。1888年噴火に伴う火山活動の活発化により磐梯火山の南西山麓の源泉の水温が上昇したこと（推定）、山頂部の温泉が1888年噴火で温泉施設として機能しなくなったこと（事実）、会津藩が消滅し温泉の開業が自由になったこと（事実）の条件が整い、ここに温泉施設「義敷温泉」が作られた。その後、火山活動の静穏化に伴い源泉の水温が低下し廃業した。

最後に、平坦地口は磐梯火山の山体の中では珍しく広い平坦地である。義敷温泉関連や慧日寺関連の遺構が存在した可能性も考えられる。しかし、2022年の現地調査では、枯れた葦が地表を厚く覆い尽くし遺構の痕跡は全く見えなかった。

謝辞 磐梯山慧日寺資料館館長の白岩賢一郎氏には、査読をいただき、また貴重なご意見をいただいた。また、エディターのト部厚志博士には多角的なご意見をいただき、匿名の査読者の方にも貴重なご意見をいただいた。さらに、宮城県登米市の佐沼古文書の会顧問の佐藤清一氏には古文書の解説をしていただいた。以上の方々に御礼申し上げる。

文 献

- 磐梯町史編纂室（1977）磐梯町史資料集第二集 磐梯町史近世資料Ⅰ—地誌編集・手鏡・村鏡—。磐梯町，34p。
- 磐梯町教育委員会（1985）磐梯町史。磐梯町，586p。
- 磐梯町教育委員会（1992）磐梯町史資料編Ⅱ。近世の磐梯町，磐梯町，178p。
- 磐梯山慧日寺資料館（1994）慧日寺を掘る—一史跡慧日寺跡発掘調査展—。磐梯山慧日寺資料館，10p。
- 千葉茂樹（2005）磐梯火山の源泉温度上昇—20度から65度へ—。地学団体研究会機関紙「そくほう」，604：5。
- 千葉茂樹（2023）1888年磐梯山噴火災害からの復興の遺構—磐梯山北麓に存在した石碑「明治神宮」—。地球科学，77：45-52。
- 千葉茂樹・木村純一（2001）磐梯火山の地質と火山活動史—火山灰編年法を用いた火山活動の解析—。岩石鉱物科学，30：126-156。
- 福島県企画開発部開発課（1965）福島県産産誌。福島県企画開発部開発課，296p。
- 犬塚又兵（1888）磐梯山噴火実況。山中英二郎，41p。
- 環境省（2022）昭和二十三年法律第二百五号 温泉法。e-Govポータル，<https://www.e-gov.go.jp>（2023.11.11参照）
- 菊池研介（1917）会津資料叢書 第3式。会津資料保存会，32p。
- 国土地理院（2023）地理院地図（電子国土Web）。<https://maps.gsi.go.jp/#15/37.606191/140.065513/&base=std&ls=std%7Cvbm&blend=0&disp=11&vs=c1glj0h0k0l0u0t0z0r0s0m0f1&d=m>（2023.7.21参照）
- 内務省衛生局（1886）日本の鉱泉史3巻上。報行社，352-353。
- 大塚専一（1890）磐梯山噴火調査。地質要報，11：143-171。

★J-Stage 登録のオープンデータ

Fig.OD-1: 古い名所案内書「磐梯山神社及恵日寺之景」

古い名所案内書の発行年は、1906年（明治39年）である。この古い名所案内書は絵と解説文からなる。絵は、前景に慧日寺が後景に磐梯山と猫魔山が描かれている。また、絵の左下側には、1899年（明治32年）に開通した岩越鉄道（現JR磐越西線）が描かれている。解説文は、慧日寺に関するものである。絵には南西方向から描かれた磐梯火山があり、その裾野の中腹には木造家屋の絵と文字「義敷温泉」がある。また、慧日寺は廃仏毀釈運動によって1869年（明治2年）廃寺となった。その後、1904年（明治37年）に寺院として復活した。古い名所案内書の発行は、寺院として復活直後の1906年である。

Manuscript title (in Japanese): 磐梯火山の南西山麓に存在した謎の温泉, 「義敷温泉」

Authors (in Japanese): 千葉茂樹

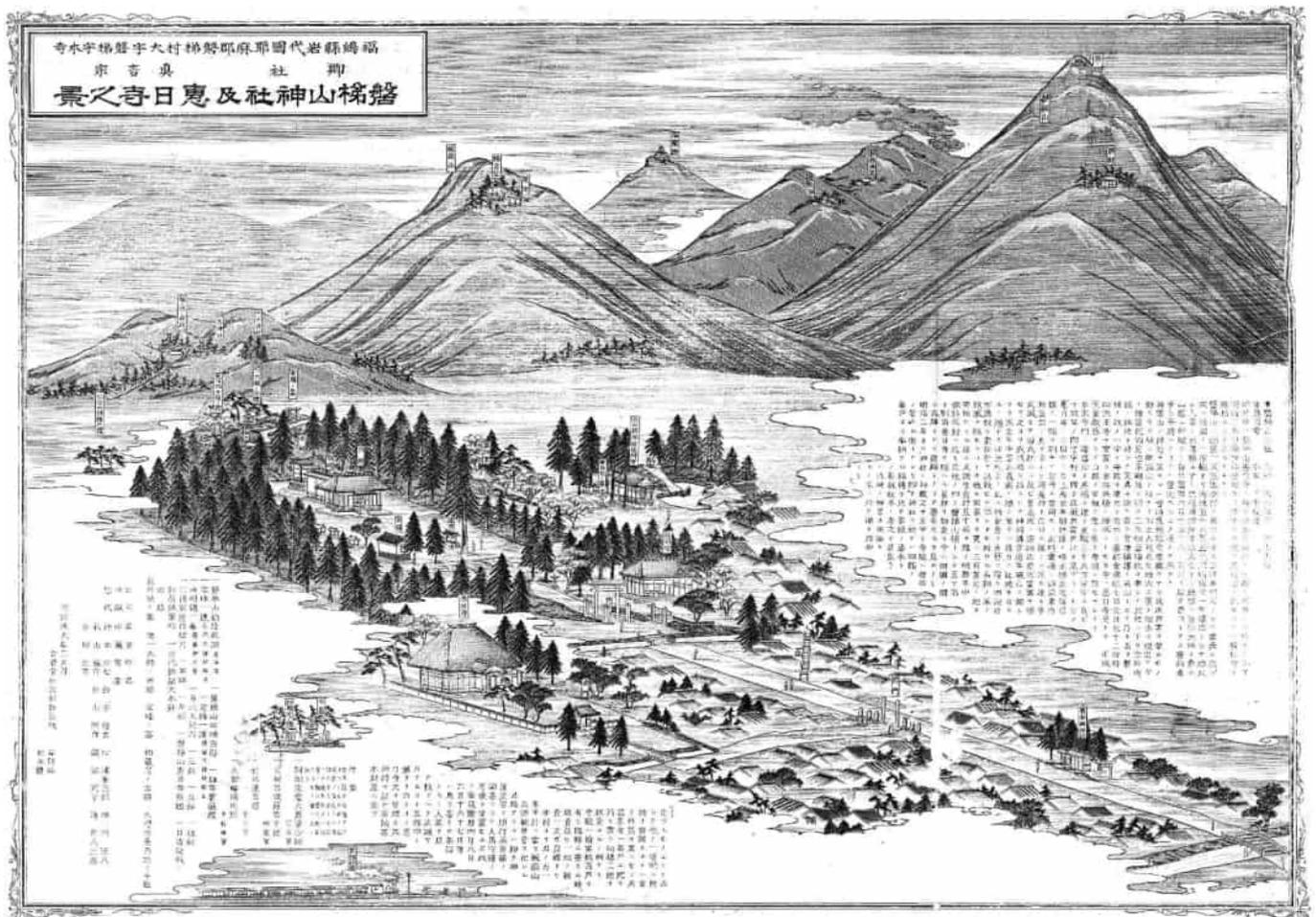


Fig.OD-2 : 磐梯火山の南西麓「義敷温泉」跡に見られる源泉の写真

図 A・B は源泉の写真で、図 A は 1987 年 4 月 12 日の様子、図 B は 2022 年 5 月 4 日の様子である。図 C は、温泉のあった平坦地を源泉付近から見下ろした写真である。源泉から流れ出した水が、2 方向に分かれて流れているのがわかる。図 D は、源泉付近で見られる黄橙色の沈殿物の写真である。

Manuscript title (in Japanese): 磐梯火山の南西山麓に存在した謎の温泉, 「義敷温泉」

Authors (in Japanese): 千葉茂樹

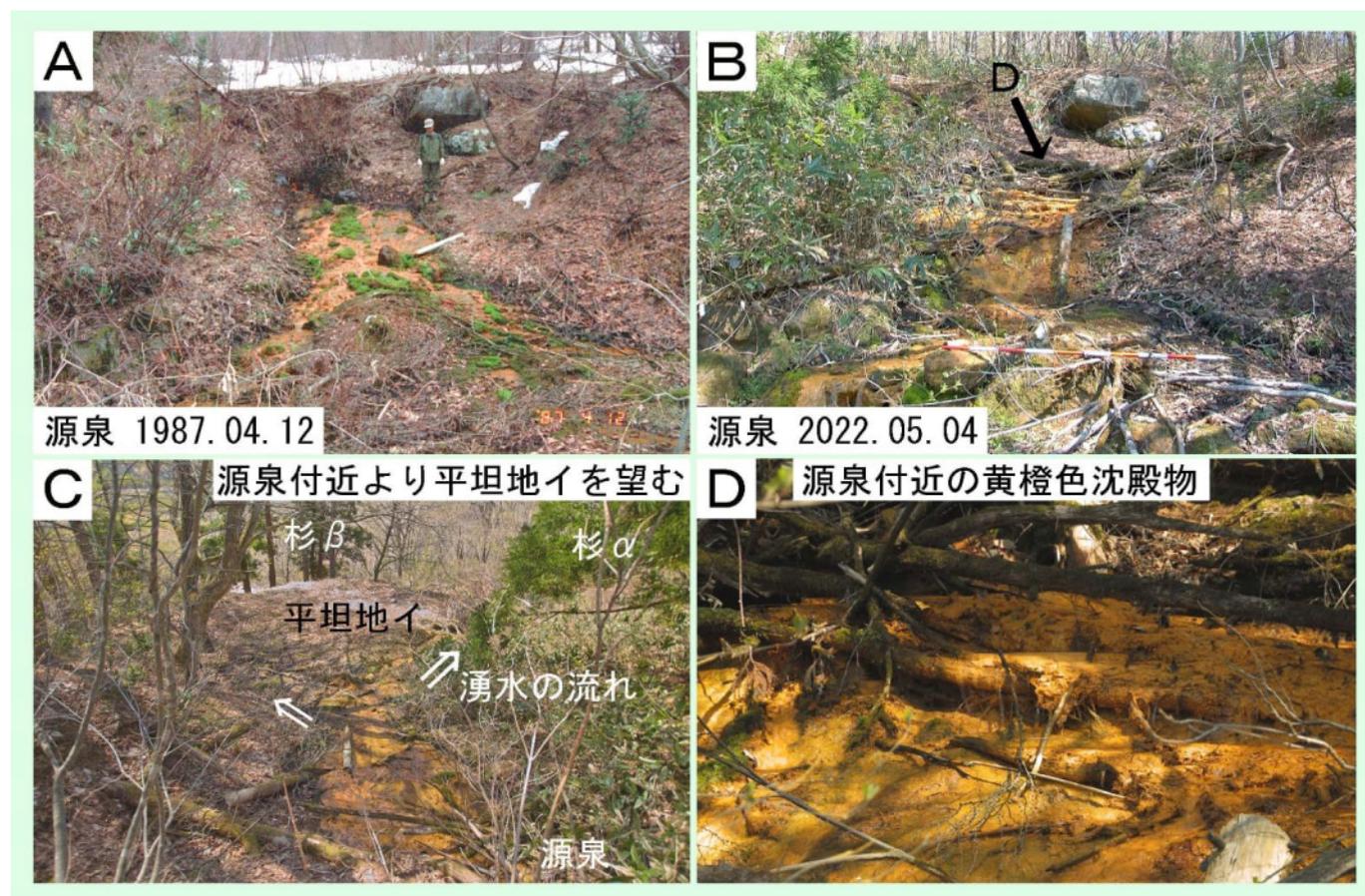


Fig.OD-3：地形図から見た磐梯山南西麓に位置する義敷温泉の変遷

図は、大日本帝国陸地測量部および国土地理院発行の5万分の1地形図「磐梯山」である。これらの地形図の発行年は、図Aが1926年、図Bが1933年、図Cが1958年である。図Aには、義敷温泉の位置に鉱泉の記号がある（←1）。図Bでは、その鉱泉の記号が消えている。図Cでは、温泉近くを通る山道が細い道から広い道になっている。

Manuscript title (in Japanese): 磐梯火山の南西山麓に存在した謎の温泉, 「義敷温泉」

Authors (in Japanese): 千葉茂樹

